

## 「徽学」研究の現状と課題

著者	鈴木 博之
雑誌名	集刊東洋学
巻	83
ページ	75-87
発行年	2000-05-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132553">http://hdl.handle.net/10097/00132553</a>

# 「徽学」研究の現状と課題

鈴木博之

## 一 はじめに

近年、安徽大学図書館編『徽学研究論著資料匯編』全十四冊（一九九六）以下『匯編』と略記―が刊行された。全体を總論（一）、徽商（二～五）、農村社会与土地制度（六～九）、文化芸術（十～十三）、其他（十四）に分けて、一九三七年から一九九五年までの四百八編の論文を収録し、それ以外にも関連論文の目録を付している。全てを網羅したものではないが、日本では入手し難い雑誌も収録されており、これまでの「徽学」研究の歩みを概観するのに便利なものとなっている。

「徽学」研究や徽州文書については、暢民・陳柯雲・周紹泉・劉重日・阿風の紹介があり、日本でも、臼井佐知子・松浦章が近年の「徽学」研究の現状をまとめている。『匯編』の刊行以後に発表された研究論文も多く、特に、阿風の紹

介は九十年代の研究を対象としていて本稿と重なる部分も多いが、本稿ではこの叢書に収められた論文を中心に、これまでの「徽学」研究の動向をまとめてみたい。

## 二 「徽学」研究の現状

徽州文書を使用した研究が葉顯恩・章有義等によって発表され始めたのは七十年代に入ってからであり、葉顯恩の研究は「佃僕」制を中心にして、宗族・思想・文化史を包合した『明清徽州農村社会与佃僕制』（安徽人民出版社一九八三）としてまとめられ、章有義は、徽州文書の中でも「置産簿」の分析に着手して、『明清徽州土地関係研究』（中国社会科学出版社一九八四）に結実させている。「徽学」という呼称が生れたのも八十年代になってからであると思われる。本節では九十年代までの「徽学」研究の現状を、地

域開発・徽商・宗族・農村土地制度に分けて概観してみた。  
い。

## (一) 地域開発

葉頤恩の著書は中国での地域社会研究の嚆矢として位置付けられるが、「佃僕」制を追及する過程から徽州社会が浮び上がってきたもので、必ずしも徽州社会自体が直接的な対象となったものではないという印象を受ける。その点で、72年に発表された斯波義信の論文は、徽州社会を江南地域開発の「山村型」の例として、社会分業と植民の進展の過程から描いており、注目すべき成果と言えよう。明清時代以前の徽州社会についての論考は余り多くないが、翟屯建の論文は、先秦時代の徽州を文献資料と55年に屯溪の西郊で発掘された二つの西周墓を基に考察している。この墓からは二十件の青銅器と原始青磁・印紋硬陶等が出土したが、その形態からは江南の越文化の特徴が見られるという。同90年の論文は徽州の経済開発と商業資本の萌芽を南朝時代の江南の水利開発と諸都市の発展に求めている。方光禄も新石器時代から唐代までの徽州地区の形成を辿り、百越文化と漢族文化の融合によって土着文化が生れたとし、秦代の越民の移民政策や三国時代の呉による武力制圧及び南朝時代の移住民の流入について概述している。王養時論文は

唐代の宣歙地区の農田水利の開発による生産の増加や鉞山・紡績・軍器等の手工業について触れ、現在でもこの地方の特産品となっている紙筆・硯・墨等の製造も唐代に起源しているという。明清時代については、凱瑟海沢頓(Keith Hazelton)・唐力行が『新安名族志』や地方志を基にして村落や人口の変動を考察している。唐の後半期に徽州の地域形成が進んだことは、諸論文でも一致して説かれているところであるが、斯波が「山村型」に分類し、傅衣凌が「山区経済」と規定しているような経済的社会的な構造がどのようにして形成されてきたのかはまだ十分に明らかになっているとは言えない。水利開発に伴う「工学的適応」と移住民社会の形成との関連も今後の検討課題として残されている。

## (二) 徽商

戦後の研究には、明清時代の商業と商業資本の問題に焦点を当てた傅衣凌と藤井宏の業績が挙げられるが、八十年代以降には、葉頤恩に引き続いて徽商関係の多くの論文が発表されている。葉頤恩が徽商の資本の来源を佃僕や奴僕による無償労働に求め、その利潤も族産や封建官僚化のために費やされたと、やや否定的に促えるのに対して、薛宗正は、明代の徽州商人の全般的な活動を取り上げ、その営

業種目や経営方式を分析して、土地への関心が低かったこととや産業資本への転化が一部では見られたことを肯定的に捉えている。秦佩珩も封建勢力の庇護の下に商業資本が蓄積されたが、文化の発展や全国市場の形成に貢献したことは評価できるとする。汪紹鏊も商業史の観点から徽商の活動を分析し、商品経済や城市の発達によって資本主義萌芽を生み出したという。『晋書』五行志の記述が徽商の商業活動を示しているという葉頤恩の説に対して、劉和恵は異論を唱え、宋代以降の地方志の記述から徽商の活動は南宋末年から始まっているが、活発化するのは元末明初以降であるとする。

九十年代になると、それまでの商業活動を中心とする研究に代わって、職業倫理・商業道德の面から徽商の歴史的な役割を評価する研究が現われる。唐力行は「商幫」としての徽商の形成を明代中期に求め、宗族による結合原理と各地の会館で朱子が祀られていることに見られるような「理学」の浸透が結び付いて徽商の「群體心理」が形成されたとし、農を本とし商を末とする伝統的な価値観から両者を対等とする価値観への変革が見られたとしている。劉和恵も「儒」と「賈」を等置する商業観や「商業書」に見られる「経世致用」の学問、「儉樸」「勤奮」「誠心」を尊んで教育や宗族に関心を示す意識形態が生み出されたとする。

徽商の最大の営業種目であった塩業については、日本でも藤井宏・佐伯富等の研究があり、徽商の興起が明初の開中法に代わる弘治年間以降の運司納銀制にあることが指摘されている。鄭力民は、明初の北辺への納糧開中から弘治年間の戸部尚書葉淇による納銀開中への変化の中で、辺商と内商が分離し、また余塩の売買の認可が塩商の富裕化に結び付いたとする。王方中は、電戸や場商・運商を中心とする複雑な清代の塩法の推移―清初から光緒年間の「票塩法」（塩引の独占権や行塩区域の廃止まで）を詳述し、塩商が塩の生産者や消費者を搾取しており、淮安では商業が産業を支配し、新たな生産構造を組織することはなかったという。劉文智は、揚州に居住した徽商の姿を、科挙による官僚化、乾隆帝の南巡に際しての費用分担や捐輸に見られる官商の融合化、壮大な庭園や建築の造営に見られる奢侈を通して描き、蓄積された商業資本が消費に向かい、封建社会の寄生者となったと結論付ける。塩商たちの奢侈生活については、蕭国亮も『揚州面觴録』を素材として描いている。清代の両淮の塩商の年収を二千万両以上と推定し、その莫大な収入が飲食・服飾に始まり、園亭・別荘の建設や「内班」と呼ばれる専用の劇団に消費され、揚州城内の繁栄を導き出したが、結果的には社会経済の発展を阻害したとする。何れも塩業資本の役割を否定的に捉えるもので

あるが、薛鏞は園林が「文会」の場所として文人墨客のサロンと化し、その中から戴震を始めとする思想家や「揚州八怪」に代表される文人画家達を輩出したとして、その文化的な役割を評価している。劉焱も揚州での塩商たちの、塩義倉や育嬰堂の建設に見られる救貧・慈善活動や救生船による救助活動、「文会」に見られる教育文化活動への貢献を積極的に評価している。朱宗宙は徽商と文人との親交や書籍の出版・書院の建設等について触れ、王振忠は「養瘦馬」という妓女を養育する風俗が揚州で盛行しており、塩商たちがそのバトロンのなつていたことを指摘する。また、彼は『淮安河下志』という郷土史料を用いて、中小都市での塩商の活動を分析している。河下は淮安府の西北三里、大運河と黄河の要衝に位置し、明代中期以降に黄氏・程氏・汪氏などの徽商が移住してきて「小揚州」という異名があるほどの繁栄した都市となったという。

個々の業種についての専論は余り多くはないが、王廷元は塩業について重要な地位にあった典当業について分析を加え、「朝奉」と呼ばれて百万〜数百万の資本を有し、全国各地の諸都市の金融界を独占していた徽商の事例を紹介し、明代の商品経済の進展と租税や佃租（押租）の銀納化に伴う貨幣需要の増大が、商業資本の高利貸資本への転化を促したことを指摘している。同じく、王廷元は明代中期

以降勃興してきた嘉定県の南翔・羅店鎮での棉布の交易や蘇州の閶門外にあった布行を取り上げ、それらが徽商によって占められており、染色業や端布業に投資するものがあつたこと、木綿の販売を担当する「販運商」は山東の臨清を中心として、遠く遼東まで活動していたことを述べる。そして、徽商の活動が江南の棉業の技術水準を高めて資本主義萌芽を滋長したが、結果として直接生産者の搾取の上に成り立っていたとする。景德鎮での磁器業については曹国慶の研究があり、陶土（高嶺）の産地が祁門県にあったことや鄱陽湖に通じる交通路があつたことから、宋代以降徽商が庄客（包売商）や水商（客商）として進出し、他の業種を兼ねながら親子代々その業種に携わつたが、アヘン戦争以後は湖北商にその地位を明け渡していったと述べる。徽州もその産地である茶業については王珍が近代までの状況を概観している。徽州の茶は唐代以降に栽培が開始され、当初は婺源県と祁門県が中心であつた。茶商は国内での販売を担当する内銷（京庄）と海外への輸出を専門とする外銷（洋庄）及び一般の販売店である茶号に区分される。歙県出身で咸豊初年の戸部侍郎王茂蔭の祖父は通県で「森盛茶庄」という内銷を経営していたこと、乾隆年間の北京には千軒以上の茶号があり、開港後は上海を中心として輸出が盛んになり、「屯緑」として知られる屯溪産の緑茶や

「祁紅」（キーマン）として有名な祁門県産の紅茶の生産が開始されたことを述べている。張雪慧は、より広い視点から茶の交易を考察し、モンゴルとの「茶馬貿易」や西南地区やチベットに至るまでの交易が行われたことを概観し、国内だけでなく日本や朝鮮及びヨーロッパまで伝播したことを述べる。

徽商研究は今後も追究されるべきテーマであろうが、個別的な資料の発掘と同時に、明清時代の地域経済の中で果たした役割をもう一度定置する必要があるのではないだろうか。

### （三） 宗族

戦前から牧野巽が家族・宗族研究に着手しており、東方文化学院（現東洋文化研究所）所蔵の『茗洲呉氏家記』巻十・社会記を素材として同族による社祭の事例を紹介している。戦後には、多賀秋五郎が族譜研究の一環として、現存する『新安大族志』（延祐三年）を始めとする三つの族譜（名族譜）について考察を加えている。ただ、元代の朱子学者陳櫟（定宇）の編纂と伝えられる『新安大族志』は、嘉靖年間以降の補刻本が現存するだけであり、明代以降の記事が挿入されている。そのため、この書は元刊本ではないのではないかという疑問が鄭力民によって出されている。

その根拠として、元刊本の存在は『新安名族志』（嘉靖三十年）の序文にしか記載されていないこと、『新安休寧名族志』（天啓六年）に収録された陳櫟の序文にある年号は彼の没後であること等を挙げ、この書の成立を成化・弘治以降と見なしている。宋漢理（H・Zurndorfer）はこの『新安大族志』を縦系にして、唐末から明末迄の徽州社会と宗族の変遷を、人口・農業・税制等の面から多角的に描き出している。そして、十四世紀以前は望族としての地位はその遷居時期の古さが大きな要因を占め、必ずしも家産や教育（科擧）を必要としなかったが、十五世紀以降は商業の吸引力の増大にともなって、宗族の発展が見られ、それが教育の高度の専業化と相まって、社会的な地位を決定するようになったという。この地方の族譜は数百部以上が現存していると言われ、族譜に依拠した研究が多い割には族譜自体の研究は余り多くない。陳柯雲は宗族の指標とも言える族譜の編纂と祠堂の建設を取り上げ、南宋末から族譜の編纂の記録はあるが、まだ「巨族」に限られており、一般化するのには明代以降であるという。宋元時代には庶民には家廟の建設が認められなかったために、祠堂が建設されるようになるのは庶民にも四世祖の祭祀が認められるようになる明代以降であるとすると同じく、陳柯雲は明代以降、宗族の鄉村統治のなかで占める役割が強化されたとし、祭祀や承継・教

育・婚姻・紛争等の種々の局面に宗族が介入し、極端な場合には「活埋」などの極刑が行われ、宗法が国法よりも重んじられたとする。

宗族研究の一つの流れとしては個々の宗族の家系を辿るものがある。歙県の方氏・棠樾鮑氏・新館鮑氏については方光祿・唐力行・劉森・趙華富・王振忠の研究があり、休寧県の率東程氏・博村范氏については劉和恵・宋漢理、黟県の西遞胡氏・南屏葉氏については趙華富の研究がある。歙県の方氏は伝説的な始祖方雷氏を祖とし、前漢末に中原から反乱を避けて逃れてきたという黟侯方儲を始遷祖としている。その後、歙県内の各村落にも支派が形成され、歴代官僚を輩出している。各地に方氏の祠堂が現存し、霞坑村には方儲を祀る「真応廟」の遺跡があるという。棠樾も多くの牌坊が林立していることで有名であるが、劉森は清初の塩商であつた鮑志道を中心にして、その活動や祠堂・族産の形成について述べている。趙華富も鮑氏の族譜を基にして墓祀・祀田・義田の経営を分析している。王振忠の論文は新館鮑氏―鮑氏の分支にあたる―の中で、紹興を中心とする浙江の各地で塩業や典当業に従事していた一族を取り上げている。休寧県の率東（由溪）程氏は、北宋初年に鄱陽令となつた頭を始遷祖とする一族で、劉和恵は『太函集』にもその伝記がある嘉靖年間の塩商程鎖の事跡を中心

にしてその系譜を述べている。宋漢理の研究は先述した『新安大族志』に続くもので、休寧県の范氏を中心にして宗族形成の過程を詳述している。范氏は唐代に宣歙觀察使となつた范伝正を始遷祖とする一族で、蘇州の范氏（范文正）とも系譜的に繋つているという。その後、休寧県の他の村落に遷居した一族もあり、宋代には数名の進士合格者を出している。ただ、徽州の程氏・呉氏に比べるとそれほど社会的な地位は高くなく、族譜の編纂が行われるのも宋末元初の頃で、商業活動への進出も元末からであるという。十五世紀以降には国内市場の発展に伴つて、江淮各地で塩・茶・木材を商うメンバーが増加する。十六世紀以降は林塘派が経済的に上昇すると同時に、一族間の格差が増大していったという。趙華富は黟県の宏村と並んで明清時代の住居が保存されている西遞村の胡氏と南屏村の葉氏について現地調査も踏まえて考察している。

次節で述べる土地制度とも関連しているが、族産の性格や役割についての研究も多い。彭超は主に族産の記録である「置産簿」や「贍契簿」を分析して、歙県の程氏・鮑氏、祁門県の洪氏を取り上げ、それらの族産の来源が、「自耕農」からの買収、「大戸」同士の売買、同族や親族からの兼任によつて成り立っていたとし、特に歙県の唐模許氏の「許蔭祠」の場合にはその祠田の半数以上は同族からの兼任に

よって占められていたという。歙県の溪南呉氏の族産の記録である『歙西溪南呉氏先塋志』<sup>1)</sup>を分析した鄭振滿は、徽商と族産形成との関係を考察している。呉氏の商業活動は明代中期以降から活発化し、それまで失われていた塋山・墓田の回復が行われ、塋山の複雑な所有関係の管理を契機として支派を統合する宗族組織の形成が行われたといい、商業利潤が族産に投資された意義を強調している。

宗族の基層部分を構成する家族（家庭）については唐力行の研究があり、十六世紀以降の商業移民によって家族の規模が縮小するのと比例して宗族組織が拡大する傾向にあり、宗族は族産の設置によって家族間の矛盾を緩和し、また儒家倫理によって家族を統制したとする。家族史の分野はまだ未開拓であり、族譜や文書資料の活用によって新たな地平を見出す可能性がある。

#### （四）農村・土地制度

徽州文書の中でも最初に精力的な発掘が行われたのは「庄僕」関係の文書であった。葉頤恩の著書以後も、幾つかの論文が発表されているが、それにつれて見解の相違も生まれてきている。既に、岡野昌子による書評でも指摘されていることであるが、葉頤恩が「佃僕」を佃戸と奴僕の間的な存在として位置付け、史料上「火佃」「庄人」「庄佃」

等と様々な名称で著わされるものをすべて同名異称として「佃僕」と総称していることへの疑問点である。<sup>2)</sup>劉重日は、「火佃」は南宋以来の佃戸制の残存形態であり、地主に対して交租の義務を負う以外に、服役等の経済外的な強制を受けたが、「庄僕」や「佃僕」ほど隷属度は高くなかったとして両者の間に差異を設けており、「庄僕」制の盛行によって衰退したと述べている。彭超も両者の区別をテーマとし、「庄僕」には売身文書があつて婚配も地主の支配を受けて「主僕」があるものと、売身文書がなく地主から土地や家屋を借りていても、「主僕」がないものがあり、「火佃」には元から「主僕」はなかったとしている。劉和恵は「佃僕」が主人を「房東」と呼んでいるように、住居の提供を受けることによって「佃僕」に転落したものであるが、服役はそれほど過重なものとは言えず、「農奴」範疇ではなく租佃制の範疇で捉えるべきだとする。このように「庄僕」制の理解に関しては見解の相違があり、租佃制に占める位置についても主要なものとする説とそうではないとする説が対立している。ただ、「庄僕」制に比較すると、一般的な佃戸や奴僕の研究は余り多くなく、それらが「庄僕」制とどのように関連していたのか、また宗族の形成が「庄僕」制にどのような影響を与えたのかについてはまだ不明な点が多い。



徽州文書の整理と相まつて土地制度に関連する研究が近年増加する傾向にある。周紹泉はこれまで余り触れられることのなかった契税の支払い証明書である「契尾」について考察し、元代の税使司発行の「契本」（官製の証明書）から清末までの変遷を述べている。この地方の一田兩主制については彭超・劉和恵・劉森の研究がある。彭超は景泰年間の田契に「田骨」の売買を示すものがあることから、その起源を明初に求めているが、劉和恵は田面権が確立するのは万暦年間以降であり、清代になってからその展開が見られたとする。劉森は田皮と田骨が分離するようになる社会経済的背景を考察し、租佃制が発達し、地主が生産から遊離するとともに、佃戸の労働力の投入によって田面権（田皮権）が生まれたとする。同じく劉森論文は民田の売買制度を対象としている。田土の売買には「断売」と「活売」があり、前者は「添価」の権利を留保した「杜売」とそれらの支払いを終えた「絶売」に区分され、後者は買戻権（取贖）があるものを指すが、質入れ（典田）や割り増しの請求権（找価）の慣習と結び付いていったという。彭超は地価と地租の関係を取り上げ、先買権のある親族間の売買のほうが価格が高くなる傾向があつて、純粹な経済関係だけで地価が決定されるとは言えないこと、田皮と田骨では田皮の売買のほうが高く、地租だけが地価決定の要因にはな

らないことを指摘する。樂成頭は徽州文書に含まれる魚鱗図冊を考察し、歴史研究所所蔵の「明成化有印魚鱗図冊」（四八葉）の甲辰の年を韓林兒政權下の龍鳳十年（至正二十四年（一三六四）に比定している。その根拠として、祁門県印の大きさが当該時期のものと一致すること、畝一角一歩という単位が宋元代に使われたものであること、魚鱗図冊の業戸名が『汪氏通宗世譜』にある明初の人名と一致するものがあること、南宋以来土地の經理が行われてきたことを挙げている。

徽州の産業として重要な林業については、陳柯雲の研究があり、栽苗・除草・施肥等の労働力と工本に対する報酬である「力分」について考察している。「力分」は「主分」に対応するもので、明初の洪武・永樂年間になって出現するという。また、契約書には「栽苗工食」（長養工食）の規定があり、これは間伐による柴薪の収入や粟・麦・芝麻等の栽培による収穫を意味している。雇用人（佃農）と山主との取り分は、「力分」による報酬と「栽苗工食」の多寡によつて決定されたという。同じく陳柯雲は、祁門県の李氏の「山林置産簿」（宣德九年・嘉靖四十三年）を分析することで山林経営の具体像を描いている。木材は栽苗から伐採まで二・三十年を要するが、景徳鎮での燃料を始めとする需要は大きく、収益性の高い商品であつた。宗族は「存衆」

や「祀産」として山林を共有財産としており、清末にはその比率が六〇%にも達したという。

庄僕制や土地制度以外の農村社会についての研究は、まだ比較的手薄であり、陳柯雲の郷約についての研究が目につく程度である。徽州の郷約は、嘉靖年間の倭寇対策としてのものから、隆慶年間以降の風俗の教化を目的とする組織に変化していき、明末には形骸化していった。清初には康熙帝の聖諭十六条の公布によって普及が計られるが、一種の恒例行事と化していった。結論として、郷約は郷紳地主が主導となり、宗族組織と結合して封建宗法制を強化するものであったという。

### 三 おわりに

以上、『匯編』に収録された論文を中心に、これまでの研究を概観してきたが、直接対象にできたのは全体の六分の一程度であり、文化芸術・其他の項には、印刷・工芸・絵画・建築・演劇から風水や集落等の興味深い研究が収められているが、それも割愛せざるをえなかった。

「徽学」研究のアプローチとしては、所謂「地域社会史」の一環として地域の特性を把握しようという方向と明清時代史の中で、それまでの官製史料だけでは限界のあった

テーマを数量的・統計的手法も用いて、より掘り下げて理解しようという二つの方法がある。葉顯恩の著書は前者の、章有義の土地研究や最近の變成頭<sup>(7)</sup>の黃冊研究は後者の成果である。しかし、狭義の農村社会史研究の面からみても、未開拓の分野が多く残されていて、全体像を描ける状況にはない。例えば、宗族研究は他地域に比較してもかなり進んでいる分野であろうが、まだ点の段階に留まっており、どのような経緯で地域内の宗族が形成されてきたのかもよく分かっていない。また、明清時代の里甲制を中心とする鄉村統治システムについても、中島樂章の老人制の研究を除けば端緒に付いた段階である。明清時代の他の分野との接点はまだ多くなく、これまでの研究成果に再検討を迫るところまでは至っていないように思う。徽学が明清時代の敦煌学<sup>(8)</sup>に成り得るためには、前者の充実とともに、その成果を後者にフィードバックしていく必要があるのではないだろうか。

多くの取り上げべき論文を省略し、論旨を誤解している部分があるかもしれないが、それらの点については、著者並びに読者の御海容を願いたい。

## 註

- (1) 暢民「建国以来徽商総述和前瞻」(『安徽史学』一九八六、  
 (一)、陳柯雲「徽州文書契約研究概観」(『中国史研究動態』  
 一九八七・五)、劉重日(姜鎮慶訳)「徽州文書の収蔵・整理  
 と研究の現状について」(『東洋学報』七〇・三・四、一九八  
 九)、周紹泉「徽州文書の由来・収蔵・整理」(『明代史研究』  
 二〇、一九九二)、同(岸本美緒訳註)「徽州文書の分類」(『史  
 潮』(新)三二、一九九三)、阿風「八十年代以来徽州社会経  
 済史研究回顧」(『中国史学』八、一九九八)、白井佐知子「徽  
 州文書と徽州研究」(『史潮』(新)三一、一九九三)、同「徽  
 州文書と徽州研究」(『明清時代史の基本問題』汲古書院、一  
 九九七所収)、松浦章「中国史における徽州の高揚―明清史  
 研究の新動向」(『東方』一九三、一九九七)等参照。
- (2) 藤井宏「明代塩商の一考察」(『史学雑誌』五十四・五、七  
 一九四三)、佐伯富「中国塩政史の研究」(法律文化社、一九  
 八七)参照。藤井論文では戸部尚書葉淇によって運司納銀制  
 が始まったとする明史食貨志の説を否定している。
- (3) 「資本論」第一編第三章には、彼による兌換銀行券発行の  
 提案が否決されたという註がある。王茂蔭については、郭沫  
 若「資本論中的王茂蔭」(『光明』三一、一九三六)、吳晗「王  
 茂蔭与咸豊時代の幣制改革」(原載「中国社会経済史集刊」  
 五・三、一九三七)「読史劄記」三聯書店、一九五六所収)  
 参照。
- (4) 本書は東洋文化研究所所蔵のもので、傅衣凌が訪日の際  
 にマイクロフィルムの形で持ち帰ったものという。「徽州千  
 年契約文書」宋元明編巻九に収録された「崇禎歙県吳氏家  
 志」は本書の抄本である。
- (5) 岡野昌子による書評(『東洋史研究』四三・三、一九八四)  
 参照。
- (6) 故陳柯雲の業績については、浅井紀「陳柯雲先生の逝去  
 を悼む」(『明代史研究』二十五、一九九七)参照。
- (7) 樂成頭「明代黄冊研究」(『中国社会科科学出版社、一九九  
 八)参照。
- (8) 中島桑章による一連の研究、「明代前半期、里甲制下  
 の紛争処理―徽州文書を史料として」(『東洋学報』七六、  
 三・四、一九九五)「徽州の地域名望家と明代の老人制」(『東  
 方学』九十、一九九五)「明代後期、徽州鄉村社会の紛争処  
 理」(『史学雑誌』一〇七・九、一九九八)「明末徽州の里甲制  
 関係文書」(『東洋学報』八〇・二、一九九八)等参照。
- 〔引用文献目録〕  
 著者 論文名／掲載誌(発行年)／『匯編』
- (一) 地域開発  
 斯波義信 宋代徽州の地域開発／『山本博士還暦記念 東洋史  
 論叢』(山川出版社、一九七二)「宋代江南経済史の  
 研究」(汲古書院、一九八八所収)／総論1  
 翟屯建 徽州先秦史初探／「徽州」一九八六／総論1  
 徽州の経済開発と商業資本的活動／「徽州師專学报」  
 一九九〇・四／総論1

方光祿

淺探徽州土着的消亡／『徽学研究論文集』一九九四／

總論 1

王賽時

唐代宣歙地区經濟探略／『安徽大學學報』一九九〇／

四／總論 1

唐力行／  
凱徽・海濱  
(Kaiti  
Hailin)明清徽州地理・人口探微／『中國社會經濟史研究』一  
九八九／總論 1

藤井宏

(二) 徽商

新安商人的研究／『東洋學報』三六・一／四 一九五

三五四／徽商 2

傅衣凌

明代徽州商人／『明清時代商人及商業資本』(人民出

版社 一九五六所取)／徽商 2

明清時代徽州商資料類輯／『安徽史學通訊』一九五

八一／徽商 2

薛宗正

明代徽商及其商業經營／『中國古史論集』(吉林人民

出版社 一九八一)／徽商 3

秦佩珩

明清徽商研究——兼論商人資本在分解封建社會過程中

所起的作用／『徽商研究論文集』(安徽人民出版社

一九八五)／徽商 3

汪紹鈺

徽商在中國商業史上的地位與作用／『商業經濟與管

理』一九八五／徽商 3

劉和惠

徽商始於何時／『江淮論壇』一九八二／四／徽商 3

唐力行

論徽商的形成及其價值觀的變革／『江淮論壇』一九九

一一／徽商 5

劉和惠

論徽商的意識形態／『中國社會科學』一九九二／

徽商 5

鄭力民

徽商與開中制／『江淮論壇』一九八二／二／徽商 3

王方仲

清代前期的鹽法・塩商與塩業生產／『清史論叢』四

一九八二／徽商 3

劉文智

清代前期的揚州徽商／『江淮論壇』一九八二／五／徽

商 3

蕭國亮

清代兩淮塩商的奢侈性消費及其經濟影響／『歷史研

究』一九八二／四／徽商 3

薛鏞

試論清中葉的徽商在揚州的業績／『徽州學叢刊』創刊

號 一九八五／徽商 3

劉翥

清代前期徽州塩商和揚州城市經濟的發展／『安徽史

學』一九八七／三／徽商 4

朱宗宙

徽商與揚州／『揚州師院學報』一九九二／二／徽商 4

王振忠

明清兩淮塩商與揚州青樓文化／『復旦學報』一九九

一三／徽商 4

〃

明清淮安河下徽州塩商研究／『江淮論壇』一九九四／

五／『明清徽商與淮揚社會變遷』(三聯書店 一九九六

所取)／徽商 4

王廷元

徽州典商述論／『安徽史學』一九八六／一／徽商 4

〃

明清徽商與江南綿織業／『徽州社會科學』一九九一／

一／徽商 5

曹國慶

明清時期景德鎮的徽州磁商／『江淮論壇』一九八七／

二／徽商 4

王珍

徽商與茶葉經營／『徽州社會科學』一九九〇／四／徽

張雪慧

商4

徽茶行銷及徽商茶業活動考略／「徽學」一九九四—五／徽商5

劉森

「歷史研究」一九九五—／農・土9

徽商鮑志道及其家世考述／「江淮論壇」一九八三—三／徽商3

趙華富

歙縣棠樾鮑氏宗族個案報告／「江淮論壇」一九九三—二／徽商3

## (三) 宗族

牧野巽

明代同族的社祭記錄之一例／「東方學報」東京 一一—一九四〇

王振忠

明清浙江塩商徽歙新館鮑氏研究—說〈歙新館鮑氏著

多賀

研究〉(御茶ノ水書房 一九八〇所収)／農・土6

劉和惠

存堂宗譜〉／「徽州社会科学」一九九四—／徽商5

秋五郎

關於〈新安名族志〉／「中央大學文學部紀要」六一—五六一「中國宗譜の研究(上)」(日本學術振興會 一九八一所収)／農・土6

宋漢理

徽州地區的発展与当地的宗族—徽州休寧范氏宗族的個案研究／原載「通報」七〇—一三 一九八四 中文訳「徽州社会経済史訳文集」(黄山書社 一九八八)

鄭力民

〈新安大族志〉考弁／「安徽史學」一九九三—／農・土9

趙華富

H・Zurndorfer 前掲書所収／農・土7

宋漢理  
(H・Zurndorfer)

〈新安大族志〉与中国士紳階層的発展八〇〇—一六〇〇／原載「通報」六七—三五 一九八一 中文訳「中国社会経済史研究」一九八二— 一九八三—

〃

明清徽州西遞明經胡氏的繁盛／「安徽史學」一九九四—／農・土9

「Change and continuity in Chinese Local history—The development of Huichou prefecture 800 to 1800」(Leiden 1989 所収)／農・土7

〃

民國時期黟縣西遞明經胡氏宗族調查報告／「安徽大學學報」一九九五—四／農・土9

陳柯雲

明清徽州的修譜建祠活動／「徽州社会科学」一九九三—四／農・土9

彭超

休寧程氏置產簿剖析／「中国社会経済史研究」一九八三—四／農・土8

〃

明清徽州宗族對鄉村統治的加強／「中国史研究」一九九五—三／農・土9

〃

歙縣唐模村許蔭祠文書研究／「中国社会経済史研究」一九八五—二／農・土8

方光祿

歙縣方氏考／「徽州社会科学」一九九三—／農・土9

鄭振滿

瑩山・墓田与徽商宗族組織—《歙西溪南吳氏先塋志》管窺—／「安徽史學」一九八八—／農・土8

唐力行

徽州方氏与社会変遷—兼論地域社会与伝統中国／

唐力行

明清徽州的家庭与宗族結構／「歴史研究」一九九一、一／農・土8

樂成顯

龍鳳時期朱元璋經理魚鱗冊考析／「中国史研究」一九八八・四／農・土8

(四)

農村・土地制度

劉重日

火佃新探／「歴史研究」一九八二・二／農・土7

劉重日・曹貴林

明代徽州庄僕制研究／「明史研究論叢」一九八二／農・土7

彭超

試探庄僕・佃僕和火佃的區別／「中国史研究」一九八四・一／農・土7

劉和惠

明代徽州佃僕制考察／「安徽史學」一九八四・一／農・土7

〃

明代徽州佃僕制補論／「安徽史學」一九八五・六／農・土8

周紹泉

田宅交易中的契尾試探／「中国史研究」一九八七・一／農・土8

彭超

論徽州永佃權和一田兩主／「安徽史學」一九八五・四／農・土8

劉和惠

清代徽州田面權考察／「安徽史學」一九八四・五／農・土8

劉森

略論明代徽州的土地占有形態／「中国社会經濟史研究」一九八六・二／農・土8

〃

明清時期徽州民田売買制度／「皇陽師院學報」一九八七・一／農・土8

彭超

明清時期徽州地区的土地價格与地租／「中国社会經濟史研究」一九八八・二／農・土8

陳柯雲

明清徽州地区山林經營中的「力分」問題／「中国史研究」一九八七・一／農・土8

從《李氏山林置產簿》看明清徽州山林經營／「江淮論壇」一九九二・一／農・土9

略論明清徽州的鄉約／「中国史研究」一九九〇・四／農・土8